

島から世界へ ～相島分校全校生徒 5 人の活動～

福岡県新宮町立新宮中学校相島分校 福澤 富美代

1. 相島と相島分校の紹介

相島は、玄界灘に浮かぶ周囲 6.14 km、人口 351 人の離島である。主な産業は漁業であるが、漁獲高の減少もあり、仕事のない島からは多くの若者が流出し、過疎化が進んでいる。島には、小学校と本土部にある中学校の分校があるが、渡船の運行本数が少なく、島からは高校へ通うことは難しいため、高校以上の上級学校に進むためには、島を離れなければならない。そのことがますます人口の流出に拍車をかけている。また、高齢化も深刻で、島民の 60% 以上が 65 歳以上の高齢者であり、今話題の限界集落である。



このような相島にある新宮中学校相島分校は、本土部にある新宮中学校の分校として、63 年の歴史のある学校である。ピーク時の昭和 30 年代には 100 名を超す生徒数を誇っていたが、現在は、島内の全ての子どもをあわせても 27 名しかおらず、今年の分校は、1 年生 1 名、2 年生 1 名、3 年生が 3 名の全校生徒 5 名の極小規模校である。小さな学校だが、生徒たちは、学校での活動はもちろん、島内の数少ない子どものリーダーとして、小学生以下の子どもを指導しながら島の行事を担ったり、ボランティア活動、島の防災のための消防活動を行ったりと八面六臂の活躍ぶりで、何事にも一生懸命取り組んでいる。

2. 子どもたちの学習活動

相島の子どもたちは、離島という環境の中で生まれ育ち、小学校から少人数指導の授業を受けてきた。また、中学校の授業においては、選択授業や一部の技能教科を除いては、各学年が単独で授業が行われており、個に応じた細かな指導を受けている。授業や行事の中では、意見や感想を述べたり人前で発表したりする機会が多くあり、特に形式に沿った発表等には慣れている。しかし、1 人だけの授業では、多様な意見もうまれにくく、また、教師の側が問題提起や問題解決のための情報や解決策を与えてしまうこともあり、自分で課題を見だし、自分で考えて行動し解決していく力が育ちにくい。また、意見や学習の交流がなく、他者の意見や考えなどから学んだり、深めたりすることが十分できずに、自分を客観的に振り返る場面が少ない。



そこで、少ない人数でも全校生徒とともに学ぶ学習であれば、1学年1名しか在籍しない学年があっても、話し合いを通して、さまざまな他者の意見に出会うことができ、学び合えると考え、3年前から島の歴史を全校で学ぶ学習に取り組んでいる。



3.調べ学習のはじまり

1年目は、島にある古代の謎の遺跡で国指定の史跡にもなっている「相島積石塚古墳群」についての調べ学習を行った。5名の生徒たちは、二つのグループに分かれ、「積石塚古墳群は誰がつくったのか?」という謎を解明するために、本を読んだり、ネットで調べたり、韓国の先生や考古学の専門家の先生に質問の手紙を送ったりしながら考えをまとめていった。積石塚は「渡来人と島人が協力してつくった」という説と「宗像の海人族がつくった」という二つの説の調査結果を発表しあって、相島分校としての結論を話し合った。調べた内容と話し合いの結果を島の人や島外から来る観光客にも紹介するために、まとめてパンフレットを作成した。パンフレットは島の渡船場に置き、無料で配布した。やがて、このパンフレットは新聞にも取り上げられ、たくさんの人から問い合わせの電話や手紙もいただくなど大きな反響があった。また、このパンフレットを手に入れるために島を訪れてくれる観光客も多かった。子どもたちは、小さな島からでも発信



すると、反響を得られるという実感をもった。さらに、パンフレットに島の概況の紹介も載せるために島の現状を調べていくうちに、高齢化や過疎化など島のさまざま問題にも子どもたちは気づいていった。

4. 調べ学習から行動へ

2年目、新入生を1名迎え、全校で6名になった子どもたちは、昨年の学習で気づいた島の問題について話し合った。高齢化や過疎化が進む島は、次第に元気を失っていっているように思えた。また、現在、島の人たちの命綱になっているとも言える町営の渡船も赤字が続いていることを調べ学習の中で知ることができた。このまま人口が減少していけば、渡船の存続も危ないかもしれない。子どもたちは、中学を卒業したら高校へ進学するために島を出なければならないが、将来は



島に戻って暮らしたいと思っている。そこで、島の生活を守り、島に活気をもたらすにはどうしたらいいのか意見を出し合った。子どもたちは、たくさんの人に島の魅力を知ってもらえば、島を訪れる観光客も増え、渡船の利用者も多くなるだろうし、また、島の



の食堂や売店などの利益も出て、島にも活気が戻るのではないかと考えた。そこで、昨年の経験から、積極的に発信するために島の魅力を伝える観光マップをのせたパンフレットをつくり、発行することにした。さらに、島の積石塚と並ぶ、もう一つの大きな史跡である「朝鮮



通信使」関連の史跡についても、パンフレットの中で紹介することにした。そして、島を回る観光客が道に迷わず観光できるように、分かれ道や史跡の場所に立て看板をつくり設置した。立て看板には、韓国とゆかりの深い相島にはたくさんの韓国の方が来られることを考え、ハングル文字での表示も併記した。また、

史跡周辺の草刈りや整備を定期的に行い、観光客が気持ちよく見学してくれるように活動をした。完成した観光パンフレットは好評で、渡船の職員の方からも、「新宮町がつくっているパンフレットより評判がいいよ」とほめていただき、島のために少しでも役に立っていることに子どもたちはとても喜んだ。

そして、3年目になった今年、再び全校生徒は5名になった。子どもたちは、島を元気にする取り組みを継続するために何をするか話し合った。様々に話し合った結果、今年は、今まで学習してきたことを生かして、観光客に島の史跡をボランティアでガイドをする活動を始めることにした。自分たちの足で歩き、島の史跡を確かめ、町誌などの資料を読んだり、島の古老から聞き取り調査をしたりして、史跡のガイド原稿をつくった。ガイド原稿をみんなで読み合わせ、練習をして、本番に臨んだ。はじめはぎこちなかったガイドも、回数を重ねるうちにだんだんスムーズになってきて、お客さんにも喜んでもらえるようになった。



5. 相島分校のグローバル教育の取り組み

～インドネシアの学校支援活動

(1) インドネシアからの手紙

そのような中、今年6月、インドネシアから1通の手紙が届いた。インドネシアに在住し、ボランティアで運営された学校の支援をしている私のかつての生徒からの手紙だった。その手紙には、インドネシアでは、お金を先払いしないと学校に通えず、貧しい農村では、授業料が払えないために学校に行けない子どもがたくさんいること、そのような子どものためにボランティアで学校が運営されているが、インドネシアでは子ども用の本が少なく困っていること、また、子どもたちは家庭が貧しいので、学用品も買えず、鉛筆さえ持たずに学校に来る子どもが多いことが書かれていた。この手紙を読んだとき、相島分校の子どもたちがこの問題について知ること、今までは島の中にしか関心が向いていなかった目を世界に向け、世界の現状や国際協力について考えることができるのではないかと、私は考えた。そこで、手紙をくれた元生徒に頼み、文章を子ども向けに書いてもらい、その手紙を、生徒会活動の時間に相島分校の子どもたちに紹介した。子どもたちは、手紙を読んで大いに関心を持ち、すぐにインドネシアにメールを送るなど何度かやりとりをして、自分たちのできる支援を考えていった。

(2) インドネシアのことを調べる

まず、子どもたちは、手紙の他に自分たちでインドネシアの子どもたちのおかれている状況を学習することにした。昨年、インドネシアやフィリピンから介護士をするために来日している人がたくさんいるという新聞記事から、それがなぜなのかを調べ、作文を書いた生徒がいたので、その子に作文の内容を紹介してもらった。さらに、ユニセフのHPや外務省のHP、授業で使っている地図帳などを使って、日本との経済格差や現在起こっている金融危機によって、多くの貧しい子どもたちが、学校に通えなくなるなどの困難にあっていることもわかった。

(3) 支援の内容と方法を考える

インドネシアの学校で使う教科書として日本の絵本が必要であると手紙に書かれていたので、まず、絵本を集めることと、さらに、中学生の家庭では小学生の時に購入し、使っていない鉛筆があることから、家庭にある未使用の鉛筆、消しゴムも集めて送ることを子どもたちは話し合って決めた。メールでインドネシアに聞いたところ、生徒が300人以上いるので、もし鉛筆等を送るのなら、全員にいきわたるようにしてほしいと言われた。

どんな方法で集めるかをみんなで話し合ったところ、

- ① 島の中の大学生までの子どもがいる家庭を一軒一軒まわり、協



力をお願いする。

- ② 協力をしてもらうために、インドネシアの子どもたちや学校の現状を紹介したプリントをつくって持って行く。

以上のようなことが決まった。そこで、協力をお願いするプリントを3年生が中心となってつくった。

（４）島での支援物資集め

放課後に、子どもたち全員でできあがったプリントを持ち、島の大学生までの子どもがいる家を一軒一軒訪問し、お願いしてまわった。プリントを渡し、趣旨を説明した後、協力して頂けるものがあれば、1週間後に再訪して回収することを伝えた。ほとんどの家庭から、快く協力してくれるとの返事があったり、また、子どもたちの活動をほめてくださる方もいらっしゃったりした。また、わざわざ子どもたちの家まで、絵本や鉛筆を届けてくれる方もおられた。子どもたちの努力で島の中だけで、絵本が66冊、鉛筆が123本集まった。鉛筆は支援する生徒の数には届いていないが、しかし、島内だけではこれ以上の数を集めるのは無理だった。そこで、生徒たちは、運動会などで毎年交流している、本土部にある新宮中学校本校の生徒会に協力してもらい、本校でも集めてもらうことができないかと考えた。本校は、全校生徒が700名を超える大きな学校なので、より多くの本や鉛筆を集めることができると思ったのである。



（５）本校生徒会にお願いに行く

そこで、新宮中学校の生徒会担当の先生に趣旨を伝え、本校生徒会と会える日を設定してもらった。相島分校の3年生が上級学校訪問で本土部に渡る7月8日、昼休みの時間帯に本校の生徒会に集合してもらい、相島分校生徒会長が代表して会いに行った。その場で、分校生徒会長が今回の支援のことを説明したプリントを配布し、絵本と鉛筆を集めてもらえるよう本校生徒会に依頼した。本校生徒会は協力を快諾してくれ、9月に島の運動会に参加するときまでに集め、持ってきてくれることを約束してくれた。



約束通り、本校生徒会は絵本と鉛筆を本校の生徒に呼びかけ、集めてくれて、絵本を100冊余り、鉛筆も395本集めてくれた。これで、インドネシアの学校の子どもたちみんなにいきわたる絵本や鉛筆を集めることができた。

（６）支援物資を送るには・・・

絵本も鉛筆も数が集まったので、これをインドネシアに送る準備を始めることにした。ところが、インドネシアまでの小包の送料を調べてみると、船便であっても10kgで5千円以上のお金がかかることがわかった。手元にある本は、50kg以上あるので、全部送るには2万5千円以上のお金がかかる。学校には、以前に消防活動などのボランティア活動でもらったお金が1万円程度



あるが、それでは全部を送ることができない。そこで、送料にするお金をどうすればいいか、子どもたちは話し合った。その結果、出てきたアイデアが、今年度からはじめて島の観光ガイドのお客さんとして来られる方に、活動の趣旨を説明して、1人100円ずつでもいいから募金をお願いしてみたらどうだろうかというものだった。

さっそく準備にかかり、9月の第2日曜日、40人余りの団体のお客さんを迎える時に、募金の呼びかけをすることになった。子どもたちは、募金箱と支援先の写真などを準備して、40数人のお客さんの前で募金の呼びかけをした。その結果、多くの方が募金をしてくださり、全部で1万6620円のお金が集まった。その後も、小学生を中心とする地域の団体や個人のお客さんからの募金もあり、10月17日現在で1万9720円が集まった。これで、送料として、全部で3万円程度のお金を使えることになり、無事に送る目処がついた。



（７）支援物資の発送

インドネシアに集まった絵本や鉛筆の数をメールで報告したところ、向こうにとって予想外の数の多さであったようで、大変喜んでくれた。しかし、インドネシアで支援にかかわっている日本人の数が限られているので、教科書として使うために日本語からインドネシア語に絵本の内容を翻訳する人の数と時間にも限界がある。そこで、絵本を「文字が多い」、「文字が少ない」、「絵が中心」などの種類に分類し、文字が多いものと絵だけのものを直接インドネシアに送り、文字数が少ない絵本は日本のボランティア団体に一端送り、そこで翻訳してもらうことにしたいとの連絡がインドネシアから寄せられた。現在、子どもたちは、仕分け作業の真最中だ。仕分けが終われば、それぞれの送り先に発送する予定だ。島の人や本校の生徒会、そして、島を訪れた観光客のみなさんの協力のおかげで、たくさんの絵本や鉛筆を集め、送ることができるようになった。

6. 学習の成果と課題

これまで、相島分校では、社会科や総合的な学習の時間等を使って、郷土史の学習に取り組んできた。その学習の中で、子どもたちは、島の史跡や歴史を知り、その価値に気付くとともに、島に誇りを持ち、愛着を強めた。そして、島の歴史を学ぶ活動から、過疎化や高齢化が進行する島の現在の状況についても認識し、問題意識を持ち、島の問題解決のために何かできることはないかと考え、進んで積極的に参画していくようになった。しかし、それは、島という地域社会にのみ向けられた問題意識であり、その段階でとどまっていた。今回のインドネシア支援の活動に取り組んで、子どもたちの視線が、島から島の外の世界に向く大きなきっかけになった。島の社会は狭く、子どもたちは、TVなどの媒体を通して外の世界を知ることであっても、島を出ることはほとんどなく、他者との関係の中でも島以外のことを知ったり、関心を持ったりすることがほとんどなかった。しかし、今回、実際インドネシアに住んでいる人と手紙やメールでやりとりし、具体的なインドネシアの学校や子どもの写真を見ることで、生身の人間の姿としての外国を感じることができ、それについて考え、行動することができた。そのことは、子どもたちの目が世界にも向き、関心を持ち、国際協力について理解を進める大きな力となったと思う。

課題としては、この活動を今後も継続してやっていけるかに不安が残ることだ。今回の活動にはじめからかかわっていた3年生3名は、卒業後は島外に住み、島に在住しなくなる。そのため、下級生にとって彼らからのアドバイスや協力を受けることは簡単ではなくなる。また、1, 2年生は1名ずつでもあり、人数も少なく、不安である。さらに、相島分校では、教職員も比較的短期間で異動になるため、先生方の力に大きく期待することなく、残った子どもたちの力だけでやっていけるようになる必要がある。そこで、2学期からは、観光ガイド等の際に、4名いる小学校6年生もできるだけ参加してもらいながら、何とか引き継いでいけないう模索している。しかし、インドネシアへの支援も今後も継続していく予定であるので、来年のための準備が必要であると考えている。今後、活動を継続していくために、どのように1, 2年生を育てていけるかが課題である。

資料1 インドネシアからの手紙(一部省略)

みなさん、こんにちは。

今回、私がみなさんにお手紙を差し上げることになった理由は、みなさんにインドネシアのことを知ってもらい、そして、できるならば援助をしていただきたいと思ったからです。

今、私が住んでいるインドネシアは、1万8千以上の島によってできた島国です。人口も、約2億3千万人で世界第4位の大きな国です。石油などの地下資源は豊富ですが、貧富の差が大きく、一部のお金持ちは宮殿のような家に住んでいますが、多くの人は1年間の収入が10万円以下で、大変苦しい生活を送っています。学校は、7歳から12歳までは義務教育ですが、国が十分に教育にお金を出していないため、教室が足りず、多くの学校では午前中と午後の二部制の授業をしています。また、地方では、校舎が足りないため野外で授業をすることも珍しくありません。しかし、学校に通える子どもはまだ幸せで、学費を前払いしないと学校には通えないため、貧しい家庭の多くの子どもが学校に通うことができません。そのため、教育を受けられずに高い収入を得られる仕事にも就くことができず、幼い時から働いたり、農村では女の子たちは13歳くらいで売られるように外国人と結婚させられたりしてしまうこともあります。

そこで、私の友人達は、インドネシア人の友人と協力して、農村の子どもたちを教育する学校を建設しました。政府からはほんのわずかの援助しかなく、ほとんどが寄付によって運営されています。現在、約300人の子どもたちが、午前中と午後の2部に分かれて通っており、教育を受けています。子どもたちの家庭は貧しく、1ヶ月日本円で50円ほどの学費も3分の2の家庭が支払うことができず、ノートや鉛筆も用意できない子どももたくさんいます。そのような環境の中で、一人でも多くの子どもたちが教育を受け、自立していけるように、私も友人達を援助しています。

今回皆さんにお願いしたいのは、インドネシアには子ども用の本が少ないので、日本の絵本を譲っていただけないかということです。日本から絵本を送っていただけたら、私達がそれにインドネシア語の訳をつけ、子どもたちの教科書にしたいのです。

学校で学ぶことが難しいけれど、学びたくて集まってくるたくさんのインドネシアの子どもたちにみなさんの協力をお願いします。

資料2 送られてきた支援をするインドネシアの学校の概要

TAMAN SURGA概要

作成日：2010年6月1日

団体名：Raudhotul Jannah

代表者：Suhendra Hanzah

所在地：Kp. Cipare Rt03/12 Desa Pancawati-Kec Caringin-Bogor Jawa Barat,
Indonesia

設立年：1998年

教室数：3教室

資金源：寄付金、政府からの支援金（ごくわずか）

生徒数：男子150人、女子182人

教諭数：9人（男性4人、女性5人）



資料3 子どもたちが各家庭や本校生徒会に配ったプリント

インドネシアの学校への絵本の支援のお願い

新宮中学校相島分校生徒会

古賀市出身の方で、現在インドネシアに在住で学校支援のボランティアをされている小林さんから、インドネシアの学校で子どもたちの教科書にする絵本を送ってこないかとの依頼を受けました。そこで僕たち相島分校生徒会で支援活動に取り組むことにしました。

インドネシアでは、日本と同じように義務教育がありますが、学費を払わないと学校に通うことができません。農村には、学費が払えずに学校に通えない子どもたちがたくさんいます。そのような貧しい農村の子どもたちのために、ボランティアで運営されている学校があるのですが、インドネシアでは、子ども用の本が少なく、教科書にする本が不足しているそうです。また、その学校に来ている子どもたちの中には家庭が貧しく、鉛筆も用意できない子どもも多いそうです。

相島分校生徒会では、まず、教科書にする絵本を集めて送ろうと考えています。僕たちが送った絵本は、小林さんがインドネシア語の訳をつけ、学校に届けてくださるそうです。また、家にある使われていない鉛筆と消しゴムがあれば、それも集めて送るつもりです。
ご協力をお願いします。

集めるもの

○絵本・・・大きさはどのようなものでもいいのですが、傷みの少ないもの

○鉛筆・消しゴム・・・未使用のもの



◆インドネシアの支援活動

○時間：生徒会活動として、放課後や土日。

○活動のねらい

- ・インドネシアの学校への支援活動を通して、島から世界に目を向け、世界の問題に関心と知識をもつようになる。
- ・問題を解決するために、自分たち出来ることは何かを考え、協力して行動できるようになる。

○活動の流れ

1. インドネシアから手紙が届き、それを子どもたちに紹介する。
2. インドネシアについての調べ学習と報告会をする。
3. 絵本と鉛筆を集めることにして、支援を呼び掛けるプリントを作り、また、島内の大学生以下の子どもがいる家のリストを作り、訪問する家を分担する。
4. 放課後に、分担に従い一軒一軒お願いして回る。翌週の放課後に回収に行く。
5. 回収した絵本や鉛筆を持ちより、数を確認。不足分をどうやって集めるかを考え、本校生徒会に協力をお願いに行くことにする。
6. 生徒会長が本校を訪問し、協力をお願いする
7. 運動会で来校した本校生徒会から絵本と鉛筆を受け取る
8. インドネシアまでの送料を確認したら、2万5千円以上のお金がかかることが分かり、その資金集めの方法を話し合い、ボランティアガイドの時に来られるお客さんに募金のお願いをすることに決める。
9. 9月12日日曜日に来られた団体客を前に支援活動の説明をして支援を募り、1万7千円余り募金が集まる。
10. その後のガイドのお客さんからの募金もあり、手持ちの資金も合わせ全部で3万円余りのお金が集まり、送料を集めることができる。
11. インドネシアにメールで連絡を取り、仕分けをして送るように依頼される。
12. 仕分けをして、2か所の送り先に送る。
13. 活動のまとめと反省をする。

12、13は今後の活動です

○成果

- ・インドネシアの国や子どもたちの置かれている現状を知り、島から世界に目を向け、自分たちにできる支援は何かを考え、行動に移すことができた。
- ・島の人、本校生徒会、観光に来られるお客さんたちなど多くの人に協力をお願いすることで、協力の輪を広げることができ、さらに説明することでコミュニケーション力や問題に対する理解も高められた。

○課題

- ・3年生が活動の中心であったため、今後の継続のためにも1、2年生の力を高める必要がある。